

## 文明の固有の貌 —イスラーム経済理論再構築の意味—

黒田壽郎

### I

中東世界を中心とするイスラーム回帰への動きは、いまだに政治的レベルにおいては評価が定まっていない。問題をイスラームの政治化という局面にのみ限定した場合、具体的な中東の、あるいはイスラーム世界の現状は依然として流動的であり、水面下で進行中の事態を無視する否定的な評価を説得力あるものと認めさせる要因が多々存在している。政治的なレベルにおける回帰の動きに対する囲いこみはいたるところに顕著であるが、事態はこのような政治局面への限定によって了解されるべき性質のものであろうか。これまでイスラームは、たんなる宗教として、精神的な価値体系として過去に属するもの、滅びゆく命運にあるものとして解釈されてきた。外部の観察者にとっては、その現代への適応性はまったく考慮の外にあったといえるであろう。

イランにおけるイスラーム革命の発生は、多くの理論家たちにとってまさしく奇様な事件であった。さまざまな領域にわたる通念の域を越えたこの現象は、ひとえに中世帰り、時代錯誤と解釈され、現在に至っている。イラン革命の具体的な帰趨は今もって定かではない。かつてチリでアジェ

ンデ政権が崩壊したように、ホメイニ体制もあえなく崩壊する運命にあるのか。それともこの事件は、それ自体の消長はともあれ今後中東、あるいはイスラーム世界で大きな流れを占める潮流の、一つの前兆にすぎないのであろうか。この点は中東の地域研究にたずさわる者が注視しなければならない大問題であるが、少なくとも誕生後8年近くも存在しつづけたこの革命に関する説得力ある学問的説明は、外部の観察者の間ではほとんど皆無であるといつてよいであろう。

このような事態をまえにして、われわれに要請されているのは、その原動力となったイスラームそのものに関する再検討であろう。巷間には、イスラームの問題についてはすべて心得ているという振りをする研究者が数多いが、残念ながらもっともあやふやなのはこの点にあるとはいえないであろうか。さまざまなディテールについては知られているが、その実体の核心部分に関する記述はきわめて少ない。そこでわれわれが第一に留意すべきは、イスラームの本性、その基本的組成の検討であろう。それはわれわれが理解するような意味での、たんなる宗教にすぎないのであろうか。事情がきわめて相違することは、例えばそれが固有の経済システムを主張しうるほど現実生活に深く関与している点からも容易に推測されうるのであろう。イスラーム経済などというものが存在し、それが宗教としてのイスラームとどのように関わっているか、といったきわめて重要な問題には完全に背をむける多くの宗教学者は、この教えの全域を十分に把握しえなかった<sup>1)</sup>。彼らはこの教えが、通常の宗教の域をこえて、政治、社会制度を律する細かに分節された固有の法をもつことは認めていた。しかし宗教的な要素と法的要素が、理論的、あるいは具体的にどのような構造をもって関わりあっているかについては、ほとんど考察がなされてこなかった。イスラーム経済の理論は、法源解釈を基礎とし、その上に構築されるものであるが、法学の伝統が連綿と維持され、新たな経済理論を芽生えさせるほ

どのエネルギーを秘めているとは、ほとんどの観察者が見落としていた点ではあるまいか。そもそも伝統的宗教学者にとっては、法学、経済学などは対象外の領域であり、宗教と経済を結びつける視点などは思儀の外にあったのである。多くの宗教は、専門的信仰者、聖職者集団の行動を規定する種々の規約をもっている。しかし俗人の形成する社会における人々の言行を規定している宗教は数少ない。これに属するものとしてはユダヤ教があげられるが、構造的にはユダヤ教と類似するイスラームとそれとを比較した場合、法的諸規定の社会性に関しては後者の方が圧倒的に分節化が進んでおり、その及ぶ範囲も広いのである<sup>2)</sup>。宗教が一般の社会生活を律する整然とした法をもっているといった点では、イスラームはきわめて特異な存在であろう。ところでこのような性質の対象を研究するために、われわれの側に適当な学問の領域があったであろうか。伝統的に宗教学者の守備範囲は、政治、社会制度を含むものではない。他方政治学者にとっては、宗教がその対象領域に直接介入したのは、遠い過去の出来事であった。宗教的原理が政治を左右するなどという事態は、彼の枠組にとっては<神聖政治>という苦むした古代か、せいぜい中世の出来事にすぎない<sup>3)</sup>。それは現代の政治学者の関心の外にあるのである。またイスラーム、あるいはイスラーム世界は、ポリネシア島嶼民の文化を研究する関心レベルで文化人類学者の研究対象となる場合もある。ただし複数に分節化された法をもつイスラーム的なものを、このレベルのみで説明することが不充分である点は、R. N・クローバーらの優れた指摘に明らかであろう<sup>4)</sup>。

以上のような知的状況と、在来のオリエンタリズムに顕著な動向を加味すれば、現在のイスラーム研究が当面している状況は一目瞭然といえる。これまで着実な努力を積み重ねてきたオリエンタリズムの貢献には、なみなみならぬものがある。クルアーン、ハディース、神学、哲学、スーフイズム、歴史、地理等個別の分野で、オリエンタリズムの伝統が諸学の解明

に大きな成果をあげてきた事実に否定の余地はない。ただしそれは、局部の、例えば切子ガラスの一部の解明に寄与するところが大きかったとしても、それが統合する全体像の提示、全体の中である部分がどのような位置を占めるか、といった固有の構造的な理解を決定的に欠いていた。全体の特性は、部分の中にその反映をもっている。そして統合的視座の欠如は、部分の本性に関する認識の欠如に直結しているのである。<sup>5)</sup>

イスラームにおいて宗教と経済とを結ぶ絆はなにか。この点を正しく理解するためには、まずイスラームの本性、その統合的な性質の根元をなすタウヒード論、次いではイスラーム法の特質について知る必要があるであろう。ところでオリエンタリズムの伝統において、イスラームの本性の認識に絶対不可欠であるタウヒード論の研究は、これまで徹底的に無視されてきている。「イスラームとはタウヒードの教えである。」現地の学者たちが再三にわたりその重要性を指摘している問題が、研究者の間ではほとんど故意に看過されてきた事実には多くの背景がある。ただしここはその委細を論ずる場ではないので、要点のみを記すことにしよう。<sup>6)</sup> 理解のかなめとなるものに関する認識を欠いた了解、判断がこの本質的理解につながることはない。もっとも基本的な問題、タウヒードの無視は、そこから派生するもろもろの事柄についての不完全な認識の原因となる。事実このタウヒード論は、<sup>7)</sup> たんにイスラームにとって根源的な問題であるばかりでなく、イスラームの社会、文化のさまざまな分節のすみずみにまで行きわたっている性質のものである。それはイスラーム文化の基調低音を形成する核となるものであるが、その場合これに関する認識の欠如がいかに決定的であったかは想像にかたくあるまい。

すべてを<一>に還元して理解する。<一化の精神>とも訳されるべきこのタウヒードは、絶対者を一として唯一神信仰の基礎となるばかりでなく、宇宙の森羅万象を神からの同根のものとして同列におくという世界観

をもたらし、存在界にたいする特定の視座を与える。タウヒードはこのように、イスラームを宗教であると同時に、一つの世界観としているのである。

タウヒード的なものは、同じ唯一神信仰に属するユダヤ教、キリスト教の中にも多々共有されている。ただしこのタウヒード性を、精神的にも、物質的にも、具体的には理論的にも、社会的にもより一層徹底、貫遂させたところに、イスラームのイスラームたる所以があるのである。世界観としてのイスラームにおける唯一性の重視は、例えばタスリース（三化、三位一体説）を基幹とするキリスト教の場合と、存在論的認識において際立った相違をもたらす<sup>8)</sup>。端的にいえば前者は、精神と物質を差異的に分離することはなく、世界を両極に分化して解釈する契機をもたないのである。聖なるものと俗なるものを切離す、＜多化する＞契機をもたぬ世界観にとって、宗教的、精神的な事柄と、俗世的な諸問題、すなわち政治、経済的諸問題とは無縁なものではない。両者は当然異なったレベル、あるいは象限に位置し、もしくは分類されることがあるとしても、ちょうど切子ガラスの一片のファセットが一つの全体を構成するように、それぞれの部分は同じ資格で全体の構成要素となっているのである。これは両者を切断、分離、＜多化＞するキリスト教的な世界観から生ずる帰結と顕著な差異をもつものであろう<sup>9)</sup>。

タウヒード観のこの特性は、イスラーム世界の知的伝統における諸学の統合性をもたらす根底のものであり、まさにこの故にイスラーム文化の統合的性格を作り出す第一原因とされているのである。ただし在来のオリエンタリズムはもっぱらこの統合的なものを、既存の西欧起源の両極対立的なものさしでのみ計ってはこなかったであろうか。タウヒード論の無視に端を発する政治音痴の宗教学者のイスラーム論、宗教音痴の政治学者の中東政治論等、いずれかはしのかげ違いの事態の出所は、このような考察によ

って欠けるところなく完全に説明されうるのである。<sup>10)</sup>

イスラーム文化の、あるいはイスラーム文明の固有の相貌の一つとしては、タウヒード観に根拠をおく徹底的な統合性がある。この固有な相貌に関する認識なしには、それに属するいかなる部分も正しく理解されえないのであるが、このロジックはそのままイスラーム世界のさまざまな領域に関する理解にも妥当するのであろう。タウヒードの観法は、精神的な問題、現実的な問題を切離さないばかりではなく、両者が同根のものとして密接に関連しあうことを要求する。宗教と法<sup>11)</sup>、あるいは経済は<sup>12)</sup>、このようにポジティブなかたちで関連しあっているのであるが、これまでのイスラーム論議は、宗教としてのイスラームを、あるいはイスラーム経済を、このようなものとして客観的に見据えた議論を行ってきたであろうか。宗教と経済を結びつけているのはこのように、世界観としてのイスラームであるが、このような特殊性こそイスラーム文化の基本的に固有な相貌に他ならないのである。

## II

イスラームにおいて宗教的関心と現世的関心が密接につながっている。したがってこの構造を正しく把握するためには、これまで指摘したように、没価値的にイスラーム、ないしイスラーム世界を観察し、この教えをわれわれの理解する意味でのたんなる宗教としてではなく、基本的な文化の構成要因として了得する必要があるであろう<sup>13)</sup>。それは他の文化的伝統と比べて見た場合、独自の強度な統合性をもっている。それゆえ例えばイスラーム経済といった一分野をそれ自体として切離して観察するならば、それがいわば切子ガラスのような全体の一部としてどこに位置し、その構成にた

いしてどのような役割を担っているかは不明である。そしてこれが未知であるかぎり、単独のファセットの特殊性もついに不明に終らざるをえない。ところでこのような全体像を解明するための鍵概念が、上述のタウヒードであるが、残念ながらこれまで、この概念によってイスラームとその文化、社会の関わり、その特殊性を解明する試みは、外部の観察者の間でほとんどなされてこなかった。分析、研究は、単純な個別的切離しの視座からなされるのみで、対象の本性に少しも適合するものではなかった。コロンプスの卵のようにこの問題の重要性は、ごく最近になって、限られた範囲で認められているにすぎない。

このような事実は、中東研究の実態を如実に示していると同時に、われわれのイスラーム経済研究の意図が奈辺にあるかを暗示するものであろう。それはたんに経済問題の解明ばかりでなく、イスラーム、ないしイスラーム文化そのものの本性の理解を試みるものであるが、そのさいわれわれの関心は多角的、多層的たらざるをえない。そのためにはタウヒードの問題に次いで、イスラーム法の特質について言及しておく必要があるであろうが、これは後に論ずることとして、まずは主たるテーマ、イスラーム経済が、われわれにいかなる関心をひくものであるかを分析しておくことにしよう。それにあたっては便宜上イスラーム経済の不在、復権、持続といった分節の仕方を採用することにする。

## 1 イスラーム経済の不在

多くの中東研究家は、イスラーム経済などというものは存在しないという立場をとる。このような立場は、当然この研究が無用の長物であるとする判断、評価につながっている。依然として自分の物さしでしか対象を見ようとししない旧式のオリエンタリスト、政治的、経済的実効性という一つの物さししかも合せぬ通俗時評家たちの立場がこれであるが、この点に

については以下のような説明が可能であろう。パーキルツ＝サドルも指摘しているように、イスラーム経済はそれが機能する十分な政治的条件が整備されぬ限り、完全な力をもつことはできない。そして第三世界のつねとして、確とした政治的、経済的力を持ち合せていないイスラーム世界が、根強く確立された現行の金融システムの影響力のさ中で、独自の強力な経済システムを確立することは至難の業である。無利子銀行の現状、実態は、オイル・グラットにあえぐイスラーム産油諸国の懐具合の悪化を前に、とるに足らぬ成果しかあげていない。このような現実は、明々白白たるものであり疑いをさしはさむ余地がない。この種の判断は実に赤子にも可能なものであるが、これは問題の半面にすぎない。

この世界では、種々の国家あるいは資産家たちが、余力のある限り収益性を度外視してイスラーム経済システムの確立を試みるが、この理由はどこにあるであろうか。ことの解明のためにはこの文化圏の特質に関する認識が必要であるが、このような特質を正確に知るためにもまたイスラーム経済に関する正しい認識が不可欠なのである。問題の無視はただ不毛につながるのみであり、正確な対象認知を導くものではない。イスラーム経済そのものは、現実態と可能態の二つのモードの間を往き来している状態にあるが、とりわけこれが文化の固有性の認識に不可欠な重要な一分野であるとするれば、容易に看過さるべき性質の問題ではあるまい。認識の総量を増やし、その精度を上げることが学問の目的であるとするならば、目先の実効性を唯一の尺度とし、対象の核心に迫る努力を放棄するこの不在説は、百害あって一利ないであろう。不在説の不毛性は、後述の二項の内容を一切含まない点からも明白なのである。

## 2 イスラーム経済の復権

現実態と可能態を往復しつつある感のあるイスラーム経済の復権は、そ



の実現を意図する人々にとっては重要な課題である。それは社会内にイスラーム性を活性化させる主要な要因、挺子の一つであり、それゆえに例えば無利子銀行の設立は目的達成の一里塚とされるのである。それが現段階においては利益獲得のための経済性という観点からではなく、一つのイデオロギー的達成の手段とされている点は特に留意されねばなるまい。

イスラーム経済に関する理念と現実との間のギャップについては、パークルツ＝サドルは経済論と経済学との相違といった次元で、さまざまな角度から論じている。この問題はわれわれにとって二重の関心を喚起する性質のものであろう。第一は、固有の経済システム確立のために、両者のギャップを埋める理論化がどのようなかたちで進められるかという問題である。支配的な経済システムとの関連、あるいはその制約、制限の下で、イスラーム経済論の現実化は当事者たちにとって緊急の課題であるが、この点における成果は復権のモードを決定するばかりでなく、そのために動員されるエネルギーの総量とも密接に関わっているのである。例えば巷間においては、イランにおける体制変革の特殊性を説明するにあたって、シーア派の宗教的特質といった点のみからの論議しかなされていないが、これは明らかに片手落ちであろう。シーア派の反体制的性質を、スンニー派の体制寄りの性格と対比した場合、変革の一要因とみなすことは可能である。しかしこれより遙かに重要な点は、果たしてある集団が変革のための理論的武器をどの程度に所有しているかということにあるであろう。体制変革と理論的武装とは、緊密な相互関連性をもっている。ことのよし悪しはともかく、ロシアのボルシェヴィキ革命は、マルクス・レーニンの理論を抜きにして成就しえたであろうか。彼らの理論は、革命後の政治、経済的モードを明確に決定づけてはいないであろうか。同様の事柄は、中国革命と毛沢東思想との関連についても妥当する<sup>14)</sup>。ただしことイラン革命に関しては、問題が漠としたイスラーム、シーア派といった事柄に還元されるばかりで、

その武器となったパーキルツ＝サドル、シャリーアティー等の思想についてはほとんど言及されることがない。だが彼らの思想はきわめて未完成の要素を多々含みながら、イラン革命のための強力な起爆剤となっているのである。さらにとりわけパーキルツ＝サドルの思想は、その後のイランの政治、経済的モードを大幅に決定づけてはいないであろうか。

このレベルでイスラーム経済不在論者の立場をとりあげるならば、それはマルクス・レーニン抜きでボルシェヴィキ革命を論ずる体のものにすぎぬ点は明瞭であろう。現実の客観的分析に眼をふさぎ、中東世界の一角で生じた大きな変化を予測するはおろか、その後の推移の意味するところを把握することのできぬこの種の研究者が唯一期待しうることは、この革命の弱体化、崩壊といった事態である。恣意的判断の排除、没価値的観察の尊重といった、学問に必須の態度は中東研究に奇妙に欠落しているのである。

不在論者の不毛は明らかなので、ふたたび理論と現実変革の関連について議論を引きもどすことにしよう。パーキルツ＝サドルの経済思想は、種々の観点から考察した場合、さまざまな不備、欠陥を内在させている。しかしわれわれはこの程度の理論が、すでにイランで重要な変化をひき起す引き金となっている事実を看過してはなるまい。現代イラン・シーア派は、彼の思想の大枠を認め、それを政治的变化に結びつける共通理解の場をもっていた。この点についてはさらに十分な論及の余地があるが、これは本稿の任ではないのでここでは割愛することにする。ところでアラビア語で書かれた彼の著作は、もちろん他のアラブ・イスラーム諸国に紹介され、とりわけその『イスラーム経済論』は、この分野における専門家たちの間では古典的な著作という評価をうけている。ただしその内容の受入れ方は、他の諸国、とりわけ湾岸諸国においては、<sup>15)</sup>もっぱらこの問題に関するアプローチの仕方について参照、模倣しているのみで、著者の思想の枠組全体

を受入れるといったかたちでの読み方はされていない。著者の主張は随所で修正され、いわばたんなる技術論的な受入れ方に止まっている。

反面それではスンニー派の側に、彼らの現状、行動様式に妥当したイスラーム経済論が存在するかという点になると、この領域では数十年このかたさしたる発展がないというのが現状であろう。<sup>16)</sup>ウラマー層の現状、彼らと一般大衆との関わり等、考慮されるべき点は他にも多々存在するが、彼らの最大の欠陥は、広く大衆に受入れられる素地をもつ変革の思想が決定的に欠如しているところにあるであろう。変革の可能性の有無は、シーア派とスンニー派の宗派的特徴云々といった事柄にはなく、変革の思想、新たなイスラーム観ないしはイスラーム経済観の存否にこそ求められるべき性質のものなのである。

さまざまな内憂外患をかかえて、イラン革命は完全に着地し、着実な前進への道を歩んでいるとは思えない現状にある。しかしそれは、変革の思想的基盤として根本的にパーキルッ=サドルの思想を採り入れている。この事実一つをとっても、彼の思想の点検はきわめて重要な意味をもつものである。それはイラン革命の帰趨を占うさいに不可欠であると同時に、今後イスラーム世界で生ずるであろう諸変化を推定するさいの、思想的レベルにおける一つの重要なパラメーターとなりうるのである。具体的には彼の思想が、秘かに東南アジアに輸入され、イスラーム新解釈の道具となっているという例も存在している。

イスラーム経済論がわれわれに喚起する第二の関心事は、イスラーム世界におけるその実現、着地の可能性とは無縁の、その思想的内容そのものにある。これまでわれわれは社会、経済体制として資本主義、社会主義あるいは共産主義といった二つの系列に属するものをしか認めてこなかった。他方現在のこれら諸主義は、いわゆるそれらの純粹型からの大幅の変化、修正を余儀なくされていることは周知の事実である。そもそも純粹型とさ

れるあり様そのものが、それらを準備した種々の思想家たちの真の意図から逸脱している点についても、最近ようやく批判的な関心が寄せられつつある。それぞれの政治、社会体制は現在もお独自の道を歩みつつけているものの、内部、深部ではそれら自身、あるいはある部分にたいする批判、再解釈が進行中であることも否めない事実であろう。そのような状況の下でイスラーム経済は、いわば第三の道の存在を主張しているのであるが、この主張は理論的にも現実的にもいまだに一人前のものとして認めるには余りにも未熟で、充分な考慮に値しないものであろうか。イラン、それより以前にはリビアといった、われわれの認識のブラック・ボックスにある諸地域で萌芽状態にあるばかりのこの思想は、現在もっぱら関心の外にある。ただし食わず嫌いの怠惰な研究者はいざしらず、この第三の道の主張は、イスラーム世界にとってばかりではなく、外部の観察者にとっても興味ぶかい側面を数多く含んでいるのである。

関心を唆られる諸点は、さまざまなレベル、領域に散在している。僅かな紙面でその委細を示すことは不可能であり、またある種の問題はディテールそのものについて多くの検討を必要とするが、その第一は文化と経済の直結性である。資本主義の場合にせよ社会主義の場合にせよ、経済問題はこれまで原則的にそれぞれの社会がもつ固有の文化とは切離されたレベルで検討されてきた。この種の切離し、それぞれ別種のプリンシプルにもとづく経済的合理性の追求が、中心諸国においてきわめて有利に働いた事実は存在する。しかし周辺諸国においては、評価はまったくネガティブであるというのが実情ではあるまいか。ところで中心諸国とみなされる国々における現在の状況を一べつしてみると、これまた否定的な要素が濃厚に醸成されつつあるというのが実態であろう。社会主義の場合はさしあたりおくとして、資本主義体制の現状をみるならば、あくことなき経済的合理性の追究はますます尖鋭化し、その度合いは固有の文化の足許をもすくいか

ねない仕儀に立ち至っているのである<sup>17)</sup>。このような事態がますます加速度的に進行し、同時にまかり間違って経済の中心が欧米世界から、仮りに環太平洋地域に移行するような仕儀になったならば、資本主義の生みの親であるヨーロッパ諸国は、この体制をどう評価するであろうか。不確かな将来の展望はさておくとしても、現在の産業体制が西欧固有の文化の足許をすくいつつあるという認識は、確実にヨーロッパの知識人の間でも強く自覚されつつあるのである<sup>18)</sup>。資本主義そのものの否定にはつながらないまでも、現在の動向に歯止めをかける思想はなにかという問題は、中心諸国においてもかなり真剣に模索され始めているようである。

中心諸国において事態がかくばかりであるとするならば、経済的自立もままならず、文化的主体性も喪失の危機にさらされている周辺部が、心をいたして独自の道を求め、強烈な自己主張へと身を挺することは理の当然であろう<sup>19)</sup>。社会主義の路線をとる革命が、ある時期以降、政治、経済的要求にも増して、文化的自主性の回復という主張を最重要の課題としているのも故なきことではないのである<sup>20)</sup>。このようなコンテクストからいえば、文化的主張を最前面に据え、その基盤としてイスラーム政体、イスラーム経済をおくという型の革命が登場するのも歴史の潮流の一つとはみなされえないであろうか<sup>21)</sup>。イスラーム以外のものとして、解放の神学の動きもまたこの一例とみなされうるであろう。植民地主義の圧力により固有の文化を廃絶された民衆が、支配者の思想を反抗的に読み変えるという解放の神学は、いまだに独自の経済体制論を生み出すには至っていないが、その信奉者たちが簡単に既存の主義、主張を踏襲するとは思われない<sup>22)</sup>。

資本主義、社会主義の中心部、あるいは新たな中心部はそれぞれ強烈に自己主張を行ない、今後もその路線を歩みつづけるであろうが、反面そのはざまにある部分でこれとは別種の傾向が醸成されつつあることも否めない。ここでまたイスラーム主義、解放の神学、いずれも底辺の出来事であ

り、考慮に値しないとするむきもあるであろう。百歩ゆずってこれを受入れるとしても、われわれは身内に宿している文化と経済のますます増大する乖離の現象にたいして、徒らに胡座していることはできまい。この問題を検討するさいに、イスラーム経済のあり様は、アナロジカルな示唆を与えてくれるように思われる。文化と経済が同根であるということは、そもそもなにを意味するものなのか。このような問いは、文化と経済を同根たらしめるような契機が、いかなるところに求められうるかという深い省察に導く一里塚となりうるものであろう。この種の問いかけは、成功したエコノミック・アニマルにとっては、まったく無縁のものであるかもしれないが、遅かれ早かれ、少なくともある種の局面で熟慮を強いられる問題であらう。

次いで具体的な局面では、イスラームが主張する複合的所有論の内容も興味ぶかい問題とみなしうるであろう。私有、国有、公有といった三つの所有形態の共存を認めるイスラーム経済は、原理的に資本主義と社会主義の中庸を行く思想である。現在多くの資本主義、いくつかの社会主義は、これらと類似の所有形態を認める傾向にあるが、バーキルツ＝サドルも指摘するように、複合的所有はそのたんなる形態の類似性のみばかりでなく、構造上の特殊性にもとずいて考察される必要があるであろう<sup>23)</sup>。そのような視点から所有あるいは所有権について吟味した場合、イスラーム経済は多くの示唆を与えるものなのである。

さらにこの思想が考慮を迫る問題は多々存在する。労働の市場商品性の否定。労働成果の帰属の集中排除。土地の私的所有制限による労働成果の退蔵の排除。貨幣の自己増殖性の否定と退蔵の排除。資本と労働の同質的把握と資本の物質性ゆえの直接的労働への従属等々<sup>24)</sup>。これらの諸問題はその一々を切離しても、またそれを統合的なイスラーム的環境の中で理解しても、種々の示唆を与えずにはいないであろう。

### 3 イスラーム経済の持続

再三指摘するように、体制としてのイスラーム経済は現在、可能態から現実態へと変化する過程にしかないというのが実情である。ただしこれはあくまでもイスラーム経済システムをトータルに把えた場合にいうることであって、細部に関しては決してそのかぎりではない。それが包括しているもろもろの細部の一定部分は、イスラームの登場以降現在に至るまで連綿と持続し、維持されつづけてきたのである。確固とした固有の法をもち、それが経済的理念、実践形態の大枠まで規定しているイスラームは、時代、地域の相違によって影響力の強弱に隔たりがあり、その様態に固有性が存在するものの、イスラーム世界の経済体制ないしは経済的实践を大幅に規制しつづけてきた。初期イスラーム社会においては全体的に、後には種々の領域、側面において部分的に、それらを律する基礎たりつづけてきたのである。トータルなかたちでイスラーム経済が機能していたのは、特定の地域、特定の時代に限られ、その時期も短い。しかしそこに含まれるさまざまな要素、あるいはその機能のネットワークのある部分は、連綿と現在に至るまで作用しつづけているのである。ザカート、ワクフ制度といった公的な性格の強いものから、遺産相続、サダカのような私的色彩の濃厚なものまで、時代の変化を受けながらも現在に継続されている諸要素は数多い。ところでこれまでの中東研究は、この種の諸要素、それらが構成するネットワークの社会的な機能を、ほとんど完全にながしおいてこなかったであろうか。

イスラーム経済の〈理念型〉の構築は、パークルッ=サドルも指摘するように、法学に関する深い造詣、透徹した構想力を必要とする複雑な作業である。同時にそれは千変万化する歴史的環境の中で具体的に運用が可能であるような、柔軟な対応性をも備えていなければならない。<sup>25)</sup>

〈理念型〉の抽出、それと歴史的現実との対応関係の分析といった主

題に関しては、なお検討さるべき問題が山積している。しかしイスラーム世界というイスラーム性の濃厚な地域の研究にあたって、このような観点をまったく度外視した分析、判断にどれほどの客観性を認めうるであろうか。イスラーム世界の歴史的研究ばかりではなく、現状認識の精度をあげるためにも、この種の視座は必要不可欠なのである。ところでこのような視座の確立のために、イスラーム経済論の研究はきわめて有効な出発点となりうるものではあるまいか。時代、地域の相違によって理念型に適合する部分、ネットワークに欠陥、屈曲が見出されるにしても、獲得、理解される種々の断片的な要素から、固有の経済的行動の構造を復元させる手続は、基本的にこの種の知識を要請しているのである。

イスラーム経済が内包する諸ファクターの浸透度、屈折、変化の様態を時代、地域別に詳量する作業は、今後イスラーム世界に関する地域研究が積極的に開発すべき重要な課題であろう。地域の固有性を無視した地域研究をもってしては、対象の客観的把握が絶対に不可能なことは火を見るより明らかなのだから。

### Ⅲ

以上中東世界、ないしイスラーム世界の研究に基本的に欠落する部分について焦点をあてながら、タウヒード論にまつわる問題点、イスラーム経済論研究の必要性、その効用について指摘した。経済理論の再構築が、イスラームないしイスラーム世界の客観的理解にとりいかに基本的に重要な問題であるかは、これまでの論旨に明らかと思われるが、この種の問題が常識のレベルで完全に無視されている現状からして、以上のような冗長な言及にもそれなりの妥当性はあるであろう。



次いで考察の対象となるのは、イスラーム世界における法学者の、イスラーム経済理論再構築の様態、構造である。

筆者はこれまで、物故したイラク・シーア派の碩学、ムハンマド・パークルツ＝サドルのイスラーム経済論に関する諸著作の若干部分の翻訳を行ってきた。この主題に関しては、これまで例えば現行の無利子銀行の活動状況に関する若干の紹介がなされているのみであり、その思想的背景、理論的根拠についての論及はほとんどなされていない。この種の紹介は、相も変わらず可能態から現実態への変化の途を模索するイスラーム経済の一端に光をあて、その具体的な実効性の観点からこの問題を判断する体のもので、その学問的貢献の射程はきわめて限定されたものといわざるをえない。簡単に不在論に還元される程度のものもってしては、復権、持続の аспекトに連なる肥沃な領分に参入することは不可能なのである。

筆者が訳出し、刊行したのものとしては、“*‘Iqtiṣād-nā*”の一部と“*al-Bank al-lā-ribawī fi-l-‘Islām*”の注を除く本文があるが、それには「イスラーム経済論」、「無利子銀行論」というタイトルが付されている。「イスラーム経済論」は、題名にも明らかなように、経済理論に関するパークルツ＝サドルの基本的解釈、主張が述べられている。また、無利子銀行論においては、現行の世界的規模におよぶ金融体制の中で、イスラーム経済を復権させる一手段としての無利子銀行の試みが提示されている。二つの翻訳は、イスラームの経済理論としての主張の内容、その具体的方策としての無利子銀行の構造を知る上で不可欠の基本文献である。これらについては直接に訳書にあたっていただくに越したことはないが、翻訳にさいしては、法学者がこの種の論議を行なうさいの方法に関する部分を省略した。法学者がこの種の議論を行なうさいには特殊の手続をとる必要がある。またそれを理解するには固有の解釈の場、方法とその構造、様態に関する理解が前提となるが、この問題に不慣れな読者にたいしては若干の説明

が不可欠であると思われたからである。「無利子銀行論」の訳出にさいしてさしてあたり本文のみを対象とし、法学的解釈に属する注の部分を後まわしにしたのもこれと同じ理由によっている。

ところで今回は、本稿の後に“*Iqtisād-nā*”の中の重要な部分、つまりイスラーム経済理論の再構築にさいして法学者が採用する方法に関する記述を訳出したが、本稿はいわば、この部分にたいする解説といえるものである。

これまで筆者は、イスラーム経済理論研究の意義を外部の観察者の立場から検討してきた。ただしその再生を意図するムスリムの法学者にとって、問題は直接にイスラームの主張と主体的に関わるものであることはいうまでもない。それはバーキルツ＝サドルの次のような表現に明らかであろう。<sup>26)</sup>「ある社会にとって経済理論とは、その社会が経済生活を営み、問題解決にあたりそれに従うことを望む方法のことである。」現行の経済体制への編入を拒み、新たな体制の確立を志向する著者の志向は明白であるが、このいわば第三の体制は、なにを基盤に、いかにして自己主張を行なうことが可能なのであろうか。

通常宗教というものが精神的事柄についてのみ関わりをもち、具体的な社会的問題に関する諸規定とは無縁である、もしくは直接の関連性をもたないといった認識の持主にとっては、それが経済理論を提起しうるなどということは予想の外にあるであろう。ここで重要なのは、宗教と法が別種の起源、根拠をもつキリスト教西欧の場合とは異なり、イスラームが宗教であると同時に固有の法をもっているという事実である。この事実は、西欧社会とイスラーム社会のきわだった相違をもたらす基本的な原因の一つなのである。そして現在われわれが対象としている経済の問題も、その細則はイスラーム法学の一分野で取扱われる。このようにイスラームにおいては、宗教と経済は同根のものなのである。

この同根性は、さまざまなレベルで例えば西欧社会の分節の流儀との相違をもたらす。その具体的な例は、経済理論と法の関係にも現れてくる。資本主義社会においては、例えば資本主義の経済理論は、人々の経済的ビヘイアールを規定する市民法とは異質の体系であり、直接の関連性をもっていない。そこでは異質の体系が接点で交わり、いわば同居して固有の経済環境を作りあげているのである。他方イスラーム経済においては、経済理論と法の二重性は認められず、法は経済理論の端的な上部構造の地位を占めている。

このような経済理論と法の等根性という特殊な関係は、イスラーム経済の固有な構造の基礎であるばかりでなく、そこにおける創造的な営為の特殊な形態をもたらす原因ともなっている。資本主義、社会主義といった他の経済体制の場合、先行するのは理論的な完成、発展であり、それが契機となってその諸特徴が、本来異質な体系に属する法に反映されるというプロセスをとる。しかしイスラームの場合、むしろ法的諸規則が理論の枠組を形成するさいの基本的要素となるといった、逆さまの、転倒した方向性をとることになるのである。

生活世界の異質な領域のそれぞれに、異なった体系が存在し、ある領域の力の拡散が他に影響を与えるといったかたちで変化と対処する文化圏の場合に相違して、イスラームの場合、あらゆる領域が等質であることを執拗に追究する。部分は全体の特質を反映して、かつ全体の相貌を指示するようなものでなければならないのである。そしてこの等質性の根拠となるものが既存の法源としての法的諸規定なのである。変化に対処するのは、新たな思想的体系ではなく、既存の諸指標の再構成、新解釈なのであり、その意味でイスラーム世界は徹底的な解釈学的磁場の中にあるといえるであろう。

訓詁の学のほとんどがそうであるように、解釈学的な場は、みずみずし

い新たな解釈の営みが繰り返されぬかぎり、別種の磁場に侵食され、併呑されてしまう。新たな思想の潮流を敏感に受入れ、時代性に適合したその内容を速やかに吸収し、その養分を具体的な力へと転化させるような文化的開放性をもつこと、これが発展の原動力であるという考えはこれまで、われわれの常識となってきた。このような観点からすれば、新解釈の遅れがむしろ決定的と思われた中東世界のイスラーム回帰の傾きは、時代錯誤もはなはだしい。イスラームは、すべての時代に通用する適合性をもっている教えなのか。それは生活世界のあらゆる領域で自己主張し、復権を求めることが可能なのか。

この種の問いにたいしては、外部の観察者はほとんど常に否定的な解答をしか寄せてこなかった。解釈の遅れは明白である。それにより充分な時代への適合性に欠けている点についても、疑念の余地はない。しかし現在の種々の情勢は、研究者にふたたび、さらに厳密にイスラームないしイスラーム性の内容の検討を迫ってはいないであろうか。パーキルツ＝サドルの経済理論の徹底した伝統主義、それが引金の一つとなったイラン革命の推移をまのあたりにするにつけても、この印象は拭いがたいが、この地域の歴史、伝統、文化のかたちを無視する研究者が異なった判断を下すとしても、それは地域の現実に即した判断、先見性の有無の問題であろう。

タウヒード的世界観の反映である諸領域の等質性の根拠となるものは、徹底した法源の尊重である。クルアーン、諸種のハディースに含まれたさまざまな法的規定は、優れた法学者の新たな解釈の努力、イジュティハードの努力を待っているが、彼の解釈の深化こそ、変転する現実にたいする社会の適合性を保証するものなのである。ところで法源としての法的諸規定は、絶対に不変の部分、コンスタントなものと、可変の部分、ヴァリアブルなものがある<sup>27)</sup>。法学者は、自らの置かれた状況の本性を確認しながらこの両者を、新たな構成のもとに体系化する必要に迫られているが、その

ためにはイスラームの主張に関する確実な認識、現状にたいする正確な判断力、厳密な法解釈の能力が要求されるのである。<sup>28)</sup> 新たな解釈の体系は、この三つの確かな基礎の上に立って達成されるが、この営みは多くの陥穽、危険を抱えもっている。<sup>29)</sup>

イスラーム経済理論の再構築にあたって、解釈者が遭遇する多くの陥穽については、バーキルッ=サドルが訳稿中で直截簡明に指摘しているので、ここで冗長な説明を行なうまでもあるまい。陥穽はほとんど、解釈者の解釈にさいしての主観性に集中される。第一の陥穽としてあげられる〈現実の正当化〉の傾向は、圧倒的な現実の規制力を前にして、解釈者がそれにたいする適合性を考慮するあまり、往々にして必要以上の妥協を行なう点を指摘している。現実の制約性と理論の正当性の境界をどこに設定するかということは、それ自体豊かな現実認識にもとづく高度な判断が要請される問題であろう。〈特殊の枠組への典拠の挿入〉、〈法的証拠の状況、条件からの切離し〉、〈典拠にたいする既存の立場の採用〉等、著者はさまざまな陥穽を指摘しながら、法解釈が主観的傾向に流され、客観性を失う原因を指摘している。

解釈者はえてして自説の正当性を主張するために、典拠を自己流に理解し、それを論拠として利用するという誤りを犯す。法的典拠が具体的に示された初期イスラーム社会の現実の諸条件を無視した解釈から身を守るためには、その時代に関するトータルな認識、諸法規についての厳密な知識と、それに関する遡大な解釈の伝統にまつわる学殖が必要とされる。連綿とつづく法解釈上の蓄積は、解釈者にいささかの過ちをも許さないほどのものなのである。ただし同時に訓詁の学の例にもれず、解釈の伝統は、時代の変化に即応しない、硬直した理解をも長らく正当化してきた。解釈者は、自らの生活経験に即して、埃をかぶった古い伝統的解釈の桎梏に迷わされることなく、時代に即応した新たな解釈の体系を編みあげてを要

請されている。その根底をなすものは、他ならぬ彼の統合的な主観的判断なのである。時代の要請とわたりあい、旧き皮袋に新たな内容を盛りこむのは、これに敏感に反応し、対処する法学者の任務なのだから。

後に掲載される訳稿は、上記のような法学者の解釈の努力、イジュティハードの過程が明快に述べられている点で出色のものであろう。詳しくは本文にあたっていただくとして、ここではイスラーム経済理論の再構築の過程の特殊性がもつ問題性について、簡単に付言することにする。

すでに指摘したように、イスラーム経済理論は、その生成のプロセスが他の諸理論の場合とは完全に逆転した性格をもっている。現行の資本主義、社会主義は、いわば時代の申し子として理論的に整備され、それを基盤に法、文化にたいして種々の影響を及ぼしている。下部構造である経済が、上部構造にあたる文化を規定するという命題は、マルクス主義のものであり、それを受入れるか否かはとにかくとして、これら二つの主張を基調とする体制において構造的に相当の妥当性をもっている。経済の理論と文化の体系は別物であり、経済情勢が文化のありようを大幅に規制している事実は動かしがたいのだから。ただしイスラームの場合、この命題は構造的に妥当しないのである。その場合にも、経済状態が理論の創出、法の解釈、適用に大きな影響を及ぼす点を看過することはできない。しかしそれらの知的作用を根本的に、あるいは大枠において規定しているのが法源としての諸法規定であるとするならば、下部構造が経済であり、その上部構造に文化がくるといった単純な図式化はなんの妥当性をもたないことになるであろう。この命題において下部構造が基礎、出発点であるとするれば、イスラームの場合当然そこに経済ばかりでなく文化が、というよりむしろ文化が経済に優先してそこに含まれるのである。この場合には下部構造としての文化、経済が、上部構造としての文化的形姿を規定するといいうるであろうか。

下部構造、上部構造の規定、関係については、なお厳密な検討が必要であることはいうまでもない。ある視点からすれば、下部構造を経済にのみ規定することにそもそも問題があるともいえるであろう。ただしイスラームの場合、この命題自体が完全に成立しえないのである。なぜならばイスラーム法の性格、それにもとづく理論形成のプロセスが、下部構造を経済と単純化することを基本的に否定しているのだから。

この命題の否定は、イスラーム文化の固有性を明示すると同時に、イスラーム世界におけるイスラーム経済への回帰が、たんに経済的分野にかぎられぬ、文化的自己主張の一つの強力な表現であるという事情をも端的に示すものであろう。

<本稿は、昭和60～63年度文部省科学研究費助成金・一般研究(A)による「現代イスラーム社会の変容の総合的研究——思想的背景と現状」の研究成果の一部である。>

#### 注

- 1) 西欧のオリエンタリストの言説が、対象の客観的な認識を意図するものであるよりは、オリエントを支配し、再構成し、威圧するための西欧の様式であった点については、Said, E., *Orientalism*, 参照。最近、待望の訳書が刊行された。エドワード・サイード、『オリエンタリズム』板垣・杉田監修、今沢紀子訳、平凡社、1986年。
- 2) ユダヤ教に社会的生活を規制する法規定が少ない点については、Moore, B., *Privacy - Studies in Social and Cultural History*, New York, M. E. Sharpe, 1984、第3章 参照。
- 3) この点に関しては拙稿を参照。【イスラーム世界をめぐる誤解の構造】  
*Bulletin of the Graduate School of International Relations, I.U.J.*,

- No. 3, July, 1985 pp.19-33.
- 4) Kroeber, A. L., *Style and Civilizations*, A.L.クローバー  
『様式と文明』堤・山本訳、創文社、1983年、68-9頁。  
湯浅赳夫、「現代政治学を超えて」、【MAYDAN】No.10, 1986年10月、  
2頁。
  - 5) この点に関しては拙稿を参照。『貌のない文明—イスラーム世界と比較文  
明論的視座—』< Comparative Civilization >, *Journal of the Japan  
Society for the Comparative Study of Civilizations*, No.1, 1985, pp.140  
-151.
  - 6) タウヒード論そのものについては、伝統的なものとしてさしあたり以下の2  
著をあげておく。  
Ibn Bābūyeh, *at-Tawḥīd*, Qum, Manshūrāt Jamā'at-l-Mudarrisīn, H. 1398.  
as-Subḥānī, Ja'afar, *Ma'ālim-t-Tawḥīd fi-l-Qur'ān al-Karīm*, Qum, Maṭba'at-  
l-Khayyām, H. 1400.
  - 7) タウヒード論の問題性については拙稿参照。「現代の危機と一元的世界観  
—イスラームの関係性と現代」【東洋学術研究】、第23巻第2号、1984年、  
98-115頁。
  - 8) この点に関しては、イクバル、アリー・シャリーアティー等の著作が示唆的  
である。部分から全体へのヴェクトルの発動の引金となる種類の思想が、濃  
密に盛りこまれている。
  - 9) 文明の特殊性を際立たせるようなかたちでの、両宗教、両文明の比較研究は、  
残念ながらこれまでほとんどなされていない。ただし例えば次のような著作  
に興味深い示唆が数多く見出される。  
'Abd-l - 'Azīz, Maṣṣūr H., *"Da'wat-l-Ḥaḡīqah baina-l-Masīḥīyah wa-l-  
Islām*, 'Iskandarīyah, Maktabah 'Alā'-d-Dīn, 1972.
  - 10) 次の論文はこのような事情を率直に指摘している。  
C. J. アダムス、「宗教学とイスラーム研究」J. M. キタガワ編『現代の  
宗教学』東大出版会、1970年。203-221頁。  
*The History of Religions*, Ed. by M. Kitagawa.
  - 11) 以下の2著はこの点を知る上で出色のものである。  
Yamani, A.Z., *Islamic Law and Contemporary issues*,  
A. Z. ヤマニー、【イスラーム法と現代の諸問題】、真田芳憲訳、中央大  
学出版部、1983年。



- 真田芳憲『イスラーム法の精神』、中央大学出版部、1985年。
- 12) この点については例えば次の著作参照。  
J. クラウス『回教の経済倫理』明治書房、1943年。  
経済をイスラーム全体のコンテクストの中で捉えている著者の視線は、鋭く対象に迫っている。後の研究の部分化、歪少化を見るにつけ、中東研究の退化を感じざるをえない。  
その他に例えば、Mannan, M.A., *Islamic Economics*, Delhi, Idarat-i Adabiyat-i Delhi, 1980. 参照。
- 13) 宗教、文化価値、社会価値の関係を鋭く考察した次のような著作の方法論は、積極的に中東研究にも援用されうるのであろう。  
Bellah, Robert N., *Tokugawa Religion*, R. N. ベラー、『日本近代化と宗教倫理』、堀・池田訳 未来社、1983年、序文参照。
- 14) 「革命理論をもたない革命行動などは存在しないとすれば、つけくわえて、民族文化の哲学をもたない、人間のイメージをもたない民族ルネサンスなどはありえないといえるであろう。」  
Abdel-Malek, A., *La Dialectique Sociale*, アンワール・アブデルマレク、『民族と革命』、熊田亨訳、岩波書店、1977年、347頁。
- 15) 逐一明記しないが、湾岸諸国の諸経済研究所の刊行物に顕著な傾向は、技術的改革論である。
- 16) 例えばエジプトの場合、変革を試みる者たちの間にサイド・クトップの論述以上の組織的な経済論は出ていないようである。これがイスラーム性の高揚を妨げる基本的な原因の一つであることはいうまでもない。  
Kotb, S., *Social Justice in Islam*, trs. by J.B. Hardie, New York, Octagon Books, 1980. 参照。
- 17) 例えばパーキルツ＝サドルの批判もこの点に集約されている。  
*Contemporary man and the Social problem*, Tehran, Wofis, 1980. 参照。
- 18) この点については、館龍一郎編『21世紀の日本経済と企業』、東洋経済新報社、1986年中の、吉森賢「ヨーロッパの衰退と日本」参照。  
同時に例えば、Garaudy, R., *Pour un dialogue des civilisations*, Denoël, Paris, 1977, *Promesse de l'Islam*, Seuil, Paris, 1981. 等参照。
- 19) イスラーム世界におけるこの傾向の一つの結晶はアリー・シャリーアティーの思想に見受けられる。例えば次著はその意味でも重要であろう。  
Shari'ti, A., *Marxism and Other Western Fallacies*, trs. by R. Campbell,

- Berkeley, Mizan Press, 1980.
- 20) Cabral, A., *Return to the source*, 『アフリカ革命と文化』白石他訳、亜紀書房、1980年、第5章参照。  
なお特に次の著書は重要。  
湯浅尠男、『第三世界の経済構造』、新評論、1976年。
- 21) イスラーム世界における経済と文化の直結性については拙稿「イスラーム経済の文化的背景」『国際大学中東研究所紀要』第1巻、1985年、参照。
- 22) 例えば Strunk R., *Nachfolge Christi*, 『キリストへの信従』大島かおり訳、新教出版社、1984年、第11章参照。
- 23) この点の明瞭な指摘については、『イスラーム経済論』第1巻83-85頁参照。
- 24) 白川勉「イスラーム経済思想における〈所有〉と〈連続性〉に関する考察」『イスラーム経済論をめぐって』国際大学中東地域研究科、64頁。
- 25) これは同時に感性あふれる歴史的研究の存在が必要である。この点では最近出色の労作がある。  
佐藤次高、『中世イスラーム国家とアラブ社会—イクター制の研究』、山川出版社、1986年。
- 26) 文部省科学研究助成金をえて、国際大学中東地域研究科は下記の翻訳、研究論文集を刊行した。  
M. パーキルツ=サドル著『イスラーム経済論』第1巻、第2巻、黒田壽郎訳、1985年。M. パーキルツ=サドル著『無利子銀行論』黒田壽郎訳、1986年。  
ちなみに前著には英訳が刊行された。  
*Iqtisādunā—Our Economics*, Tehran, Wofis, ただし劣悪な翻訳で利用に耐えない。
- 27) 法的規定のさまざまなレベルにおける曖昧性と一貫性の意味については次の優れた指摘を参照。  
Charnay, J. P., “Pluralisme normatif et Ambiguïté dans le Fiqh,” *Studia Islamica*, XIX, 1963, p. 65 et suivantes.
- 28) この点については例えば次の著作参照。  
Coulson, N. J., *Conflicts and Tensions in Islamic Jurisprudence*, Chicago, The University of Chicago Press, 1969.
- 29) 純粋に法学的な問題に関する理論形成の問題については、パーキルツ=サド

ル自身の次のような好著がある。

Bāqir-ş-Şadr, Muḥammad, *Durūs fi 'Ilm-l-'Uşūl*, 2 vols,  
Beyrut, Dār-l-Muntaẓir, 1985.

# Hidden features of the Islamic civilization

— With special reference to Islamic Economics —

*by* Toshio KURODA

Even at this moment, there exists a strong tendency among specialists to underestimate the importance of attempts by muslim thinkers to reconstruct Islamic economics. Needless to say that their attempts cannot bring any significant achievement, as long as Islam is unable to be rid of the overwhelming and irresistible control of the present international economic system. What they have achieved in this field is, so far, of no significance. However, this does not mean necessarily, that our investigation into this topic is utterly useless.

The study of Islamic economics sheds light on manifold dimensions. First of all, it serves for us to get important criteria in judging the politico-economic situation of Islamic countries. We should not forget that the theoretical achievements of the late M. Bâqir-ş-Şadr in this field was one of the most powerful ideological weapons for the revolution in Iran. In most cases, the Iranian revolution has been treated without reference to such ideological factors, but this is as absurd as the Bolshevik revolution in Soviet Russia being treated without reference to the ideology of Marx and Lenin. This is one of the basic reasons why observers on Iranian affairs have so often failed in their judgement.

Moreover, the study of Islamic economics helps us a lot to clarify some of the hidden features of the Islamic civilization itself. In this article we

started from the analysis of the basic characteristics of Islam, making use of its most important key-concept, <tawḥīd>.

Tawḥīd, the fundamental principle of the Islamic worldview, regulates every aspect of believers' lives, their thinking and their conduct. It is this concept in Islam that assures and guarantees the integrity and consistency of all aspects of life. In short, thanks to this notion, spiritual aspects are inseparably linked with worldly affairs; for example belief with economics. This strict rejection of dichotomy between the sacred and the profane creates many important characteristics in Islam, on which unfortunately, effective approaches have not yet been tried.

Then, we tried to examine the nature of the relationship between shari'ah (Islamic Law) and Islamic economics, based mainly on the argument of Bâqir-ṣ-Ṣadr as expounded in his master piece, "Islamic Economics". This kind of approach serves for clarifying not only the unique nature of Islamic economics but some basic characteristics of Islam and Islamic civilization.